## 戦後80年記念 中学生広島派遣成果報告スライド 原稿

(内容欄記載の()書きの数字は、スライドの●枚目を表す)

## 1班

内容	原稿
はじめに	みなさんこんにちは。 これから「戦後80年記念 中学生広島派遣事業」の成果報告をはじめます。 わたしたち「福島市中学生平和大使」は8月5日から7日に、被爆地である広島市を訪れました。この3日間の広島派遣の中で、平和記念式典への参列や平和記念資料館の見学、被ばく者本人の講話、全国の同世代との意見交換などをとおして、「戦争の悲惨さ・平和の大切さ・命の尊さ」について、たくさんのことを実際に見て、聞いて、考えました。 今日は、3つの班から、広島で学んだ成果を発表いたします。この発表で、平和の大切さ・命の尊さについて、多くの方に考えていただければと思います。それでは1班の報告を始めます。
本川小学校 (3)	まず、初日にフィールドワークで本川小学校を訪れました。本川小学校の資料館では、熱線によって溶けたガラスの塊や変形した銃など、当時の状況を目で感じました。本川小学校に通っていた約400人の児童のうち、たった一人生き残った「居森清子」さんの被爆体験を知ることもできました。いつも通りに生活していた清子さんでしたが、一瞬にして校舎の窓ガラスが吹き飛び炎が吹き出したそうです。仲良くしていた同級生も丸こげになってしまい、亡くなりました。その後は「平和の大切さを伝えるために私は生かされている」と思うようになり、平和の大切さを人生の最後の最後まで伝え続けました。全国各地から送られた折り鶴は「平和」に対する思いが詰まっていました。この悲惨な歴史は、決して忘れてはいけないものだと実感できました。
平和記念資料 館 (4,5)	また、初日は平和記念資料館にも訪れました。 平和記念資料館では、原子爆弾が落とされた直後の街の様子、 人々の様子、見学を進めれば進めるほど胸が締め付けられるもの ばかりでした。 原爆の影響で黒焦げになった少年のお弁当やボロボロになった 衣類の展示などさまざまな原爆の被害や後遺症を学びました。こ れもまた自分の目で当時の状況を知りました。破れたモンペや苦 しんでいる人たちの写真が自分の目の前にうつしだされたとき、 すごく胸が締めつけられました。特に胸が締め付けられたのは、

内容	原稿
	被爆した方々の絵でした。     一瞬にして街は破壊され、多くの人々が何が起ったのかも分からないまま命を奪われました。生き残った人々も、火傷でパンパンに膨れ上がった顔、だらりと垂れ下がった皮膚、変わり果てた姿で炎の中を逃げまどいました。     壊される前のまちと破壊されてしまったまちを見比べると、一瞬で当時の日常が消えてしまったのが目に見えました。
平和記念式典 (6,7)	2日目の始めに私たちは平和記念式典に参加しました。 平和記念式典では、8時15分に参加者全員で黙祷をしました。次に広島市長による平和宣言やこども代表による平和への誓いが行われ、その後総理大臣の挨拶などもありました。 そして最後にひろしま平和の歌を式典に参加した全員で歌ってみんなで「平和」を祈りました。式典には、地域の方から外国の方まで約5万7000人というたくさんの来場者が訪れたのでとても多く驚きました。
全国子ども平 和サミット (8,9,10)	次に、全国子ども平和サミットに参加しました。 そこでは原爆を体験した梶矢文昭さんの話を聞きました。 かじやさんは小学一年生の時、爆心地から1.8km離れた分散授業 所で被爆しました。 かじやさんは3年生の姉と玄関を雑巾で掃除していました。お姉 さんが水を変えに行ってくれている時、かじやさんは何か変だ な。と感じ、外の方をみました。「それは光った、ぴかーーっと 光った。」それをみた瞬間、「ぶわーー」という風。かじやさん は何が起こったのかわかりませんでした。たくさんの飛行機が飛 んでいたわけでもないのに広島市がぼうぼうと燃えている。 その時ふと、「あれ、お姉さんはどこに行ったのだろう。」探 した未、草の上に姉が横たわって死んでいるのを見つけました。 僕がバケツの水を変えに行っていれば僕が死んでいた。姉が玄関 に残っていれば姉は生きていた。という気持ちが一気に込み上がってきたそうです。 かじやさんは被爆者の一人として、三度目は絶対に使わせては いけないと思っているとおっしゃっておりました。 さらに、各都市の平和への取り組みの発表では、いじめゼロを 目指すためのいじめ根絶スローガンを作ったり、人権を守るため にジェンダー活動として私服で登校し、個性のあり方を学ぶこと のできるweekを設けたりする活動を行っているということでし た。福島市でも、できる活動をすることで身近なことから平和を 創りだしていけると思いました。
先生の話 (11)	次に、私が心に残った先生の言葉を紹介します。 それは「一人一人にエピソードがある。」という言葉です。事

内容	原稿
	前学習で、福島には原爆を投下する訓練をするために使用された 「模擬原爆」が落とされ、一人の少年が亡くなったという話を聞 きました。この話を聞いて正直「一人か。」とほんの少し軽く受 け止めてしまいました。 ですが、先生の言葉を聞いてからは、「人が亡くなってしまっ たのか。」と人数にとらわれず、その人にもその人の大切な人、 もの、人生という、『エピソード』があったと考えるようになり ました。
平和学習の集 い (12)	最終日は、平和学習の集いに参加しました。 この集いでは、7つの県から集まった小・中・高校生で平和についてグループディスカッションを行いました。その話し合いでは、「今、平和ではない状況」や「私たちの地元での戦争中の状況」の2つの議題について話し合いました。 その話し合いをもとに「どうしたら世界は平和になるのか」について最終的には会場の全員で話し合いました。 また、被爆者の方のお話を生で聞けるという貴重な体験をさせていただきました。被爆者の方々の言葉1つ1つが心に深く響きました。戦争の悲惨さを直接体験された方の声は、とても重みがあり、教科書や映像からでは決して得られないものでした。 愛する家族を失った悲しみ、原爆への憎しみが伝わってきて、戦争の恐ろしさをとても身近に感じました。
感想 (13)	今回の広島派遣事業を通して戦争の悲惨さや平和の尊さを強く 感じ、改めて「二度と同じことを繰り返してはいけない」と強く 思いました。今も社会にいじめや差別などの「争い」があること を忘れず、一人一人が平和について知り、考え、行動し、相手の 気持ちを思いやることが大切だと思います。 これからは、広島で学んできたことを家族や友人に伝えて戦争 の悲惨さや平和の大切さについて考えるきっかけを作っていきた いです。そして、自分自身も平和を守る行動を大切にして、誰も が安心して暮らせる社会を作っていきたいです。
結びに	これで「戦後80年記念 中学生広島派遣事業」1班の報告を終わります。 ご静聴ありがとうございました。

内容	原稿
1番 はじめに	「中学生広島派遣事業」2班の報告を致します。
平和記念公園 (15)	初日に私たちは、フィールドワークで平和記念公園を訪れました。 まず原爆の子の像にいきました。原爆の子の像の周りには、様々な地域から集められた千羽鶴が飾られており、それだけ多くの人が平和を願っているんだということを知る事が出来ました。次に平和の鐘にいきました。平和の鐘は、鳴らす事ができ、鳴らすと原爆が落ちてからの日々のように、鐘の音が長くゆっくりと響きました。 他にも韓国人原爆犠牲者慰霊碑という物が建っており、韓国から連れてこられた人も被害に遭い死者も出てしまっているということを知りました。異国の地で亡くなり、故郷の地に埋めてもらえなかった人が韓国の方達に多いと知り、もし自分だったらと思うと胸が締め付けられる思いになりました。
平和記念資料館 (16,17)	また、平和記念資料館も訪れました。 平和記念資料館では、80年前を感じさせる様々な写真が展示されていました。今広島市内を歩いていると、80年前を感じさせるものはほとんど残っていないほど復興していました。これは80年前の想像を絶する犠牲を乗り越えた上にあるものだと思います。平和記念資料館では、80年前に本当に広島の街に原爆が落ちたということを物語っていると感じました。特に印象に残っているのがN家の崩壊という展示です。たった一つの爆弾、たったその瞬間で、一つの家族が崩壊してしまったことについて書かれていて、とても残酷だと感じました。また、直接原爆の被害を受けた人以外にも、その後に生まれた人にも原爆の影響が及んでいることについても知り、アメリカは「原爆を落とさないという判断をできなかったのか」と感じたと同時に「日本は戦争の道をなぜ歩んでしまったのか」とも考えました。
平和記念資料 館 (18)	そのほか、当時の状況を描いた「絵」もありました。 その絵には原爆による大火傷で皮膚がただれ、血まみれでもう人 かもよくわからない人の絵がありました。 このような状態の人々が何千人も、何万人もいたと考えると当 時の状況がどれだけ悲惨で、恐ろしい状況なのか、原爆の威力、 どれだけ非人道的な行為かが痛いほど伝わってきました。 他にも、まるこげになってしまった三輪車、制服、お弁当箱、

内容	原稿
	溶けてしまった瓦礫など色々な物一つ一つが、原爆がどんなものだったのかを物語っていました。 資料館を見て、原爆は人々の生活を一瞬で奪ってしまう恐ろしいものだと痛いほど感じさせられました。
平和記念式典 (19)	2日目、私たちは平和記念式典に参加しました。 平和記念式典では、広島市長のお話、こども代表平和の誓い、 石破茂内閣総理大臣の話、広島県知事の話、国際連合事務総長の 話、ひろしまの歌の合唱など、8時00分から8時50分の50分間で行 なわれました。 参加されていた方々の式典中の態度をみると、平和を願う気持 ちや戦争を二度としてはいけないという気持ちがとても伝わって きました。 とくに、印象に残ったのは、子ども代表の平和の誓いです。戦 争を経験していない、しかも私たちよりも年下の小学校6年生によ る誓いの言葉でした。子どもでも戦争の恐ろしさや命の尊さを伝 えている姿が世界の平和を訴えているように感じました。 貴重な体験ができたからこそ、総理大臣の話や広島市長の話な どをより多くの方に伝えたいと思いました。
第一回全国子 ども平和サミ ット (20)	第一回全国子ども平和サミットでは、実際に被爆された方の体験談や、被爆の瞬間を朗読で伝えていく方の力強い声、そして、平和に向けて動き出している様々な都市の学生の話を聞きました。 北は北海道から南は沖縄まで、「自分達はどんな活動をしているか」の発表では、戦争をなくすために、まずは自分たちが学ぼうと、戦争体験者のお話を聞いたり、記念館の見学に行ったりしている発表や、商業と平和を足したりするなど、自分たちの身近なものと結びつけて「平和」を考えている発表、いきなり「平和」という大きなところに行くのではなく「いじめ」や「人権」など、周りで起こっていることから解決していこうと活動している発表もありました。 多種多様な活動内容を聴いていく中で、「じゃあわたしたちには何が出来るのだろう?」という疑問がでてきました。実際、福島には模擬原爆が落とされており、尊い1つの命が失われてしまいました。戦争は、年齢、性別関係なく人の尊い命を奪っていく。そんな悲劇は二度と起きてはいけない。起こしてはいけない。この大切さを派遣に行った私達が伝え続けていくべきだと感じました。
平和学習の集 い (21,22)	最終日には、第一回全国平和学習の集いに参加しました。 平和学習の集いでは、全国の中学~高校生の人が集まり、被爆 者の方から講話を受けたのち、「自分の地元では戦時中にどんな

内容	原稿
	被害を受けたのか」「平和のために私たちができることは何か」という議題を、いくつかの班に分かれてグループディスカッションを行いました。 話し合いでは、隣町の大空襲の影響で遠くの空が赤く見えた街や、疎開のために沢山の人が運ばれてきた街の話を聞きました。 私たちは、今住む福島市の被害として、わたりに落とされた模擬原爆のことを話しました。 平和のためにできることを私たちなりに話し合った結果、「全員が過去を知り、交流しあって考えを共有する」という結論が出ました。 住むところは違えど、同じ中学生が同じように平和を願い考えられたことがとてもいい経験になったと思います
8番感想(23)	私たちはこの広島市派遣事業で、普段当たり前に思っている平和が当たり前ではないことを改めて実感しました。 私は実際、この事業に参加するまで、あまり原爆のことについて知りませんでした。広島に行って、実際に被爆者の話をお聞きしたり、グループディスカッションをしたり、他県の方々との交流をしたりすることで自分の考えをより深めることができました。 あまり身近に思えず、遠くの存在だった戦争や原爆のことが、被爆者の話を聞いたことで、とても身近に感じることができました。 原爆の被爆者の平均年齢は86歳で、年々上がっています。被爆者がいなくなる未来もそう遠くはありません。そこで今回学んだことを身近な人に伝え、後世に繋げていきたいです。
9番結びに	これで2班の発表を終わります。 皆様ご清聴ありがとうございました。

内容	原稿
はじめに	みなさんは、戦争や原爆についてどのくらい知っていますか? また、どのようにすれば世界は平和な状態になると思いますか? わたしたち3班は、この3日間の広島派遣で考えた「戦争の悲惨 さや平和の大切さ、命の尊さ」についてまとめましたので、お聞 きください。
平和記念公園 (26,27)	はじめに、平和記念公園を訪れました。 平和記念公園とは、原爆による犠牲者を追悼し、平和の大切さ を伝えるために作られた公園です。 平和記念公園には、主に広島平和都市記念碑、平和の灯そし て、原爆ドームがあります。 この写真は、広島平和都市記念碑です。この記念碑は原爆によって壊滅した広島市を、平和都市として再建することを祈願した ものです。 平和の灯とは、1964年8月1日に原爆の火が灯され、この世界に 核兵器が無くなるまで燃え続けることを予定した灯です。 原爆ドームとは、核兵器の悲惨さを伝える貴重な建造物とし て、世界平和を訴える象徴になっています。
平和記念資料館 (28,29)	また、平和記念資料館にも訪れました。 平和記念資料館では、様々な物を見てきましたが、その中で心に残った三つを紹介します。 一つ目は被爆したお弁当です。被爆したお弁当は13歳の私たちととても歳が近い子供が持っており、より身近に戦争の悲惨さを感じました。 二つ目は死の斑点という症状が出てしまった被爆者です。9月1日から歯茎の出血が止まらず顔や上半身に無数の斑点が現れました。2日目に意識不明となり、3日の夜にお亡くなりになりました。今は治すことができる病気を昔は治せなかったことを知り、沢山の方が亡くなったことがとても悲惨だと感じました。三つ目は被爆を受けた子ども達です。 被爆を受けた子どもたちは、親や家族へ向けたメッセージなどを残していました。自分もその言葉でたくさんのことを考えました。
平和文化活動 の集い (30)	次に平和文化活動の集いに参加したことについてです。集いの中には小学生から高校生のさまざまな歳の生徒が参加していました。大きなモニターにスライドを映しての発表でした。 発表の中にはいじめを廃止するための発表や別の国にも原爆を知ってもらうための活動、それぞれの地域に残っている戦争の跡を紹介する発表などさまざまな発表がありました。 各県での平和に対する取り組みを、これから行っていく私たち

内容	原稿
	の発信にとり入れていきたいと思います。
平和学習の集 い (31,32)	最終日には、第一回全国平和学習の集いに参加しました。まず、被爆者の内藤愼吾さんの講話を聞きました。弁慶蟹を捕まえようと防空壕で待ち伏せしていたところ被爆しました。内藤さんは、家を出ていたから助かりましたが、家を出ていなかったら亡くなっていたそうです。生死を分ける二択は気付かぬうちに身近なところに溢れていたんだと思いました。その後、他県の生徒たちと6人グループで、グループ・ディスカッションを行いました。自分の地域で第二次世界大戦中に受けた被害、今平和ではない状況は何か、それはどうしたら解決できるかについて話し合いました。実は、福島県でも被害を受けていました。渡利に模擬原爆が投下され、当時14歳だった男の子が亡くなっていたんです。他の地域でも模擬原爆や爆弾の被害を受けており、たくさんの学びが得られました。同じ年代の人たちからたくさんの意見を聞ける、良い機会でした。
感想 (33, 34)	私はこの事業に参加して、これまで私が思ってきた当たり前と、同じ国に住む昔の人達の当たり前の差を目の当たりにし、爆弾に怯えずに自由に過ごすことができる私の当たり前のありがたさ、その当たり前が存在しているということの奇跡を知りました。 そして、平和記念式典に参加し、爆心地を歩き、たった80年前、っ事実にショックを受けました。 被爆者の内藤さんは原爆に対する憎しみ、悲しみはもちろんある。だが、そのような感情だけでは平和にはならない。だからこそ、当時の状況を伝え続けることが戦争から生き残った者の使命だとおっしゃっていました。私は、被爆者の方にと思います。今、平和な環境にいる私にできることは、これから出会う沢山の人々にこの体験を話し、目を覆いたくなるような辛い内容でも、戦争と向き合い、戦争と平和を知り、まずは身近な人と共有することだと思います。また、日本の戦争の被害を知ることだけではなく、他国の被害や人々の気持ちも調べたいと思っています。過去の戦争が忘れられることがないように、二度と戦争がおこらないように、私にできることを探して戦争と平和について考え続けたいです。目を背けたい事実に向き合う勇気を。未来へ繋いで行くのは私達の番です。

内容	原稿
結びに	私たちの発表で少しでも戦争や平和に対する考えや思いは変わりましたか? これで「戦後80年記念 中学生広島派遣事業」の報告を終わります。 今回の派遣事業のために、ご支援くださったみなさま、そして、送り出してくれた家族に感謝します。  私達、福島市中学生平和大使21人は、この貴重な体験をたくさんの人たちに伝え、そして、これからも平和について考え続けていきます。 本日は、ご清聴ありがとうございました。